

# 桜橋

黄令卿  
交換留学生 中国

長い桜橋を抜けると、大年神社であった。青空の底が桃色になった。鳥居の前に私の足取りが止まった。

思っていたよりきれいな桜に感動した。その花びらは、まるでピンクの綿菓子のようなだった。果てしない青空から、涼しい風が吹き渡ると、花卉が美しい、美しい雪の如くはらはらと降り注いだ。神社についての説明文を読んでいると、水の音に心を奪われた。すると、親子二人が池の前で手を洗っていた。水の冷たさのせいか、子供は「ワー」と興奮して笑っていた。お父さんの娘への深い慈しみや娘さんのきらきらとする笑い声は、私には美しく感じられる。このような風景を見たのは、これが初めてではない。

私の故郷の済南市は、和歌山市と姉妹都市である。そのおかげで、七年前、中学生の時に、私は済南市の青少年を代表して和歌山市を訪問したことがある。桜が満開の四月であった滞在中、活動のない休みの日に、ホームステイの日本人の友達と一緒に紀三井寺に行った。その時も、親が子供を神社に連れてきていて、手水舎で手を洗っている光景をよく目にした。わたしが初めて訪問してから、時間が結構経ったが、変わらないのは、親子の幸せそうな微笑みと昔から日本人の心底にある幸福を追求する心であった。

手水舎の横に老木の上に、多くの木の板が結ばれていた。近づいてみると、板の表には「一家平安」「金榜題名」とか、「中国で留学してる彼氏とはやく会いたい」などが書かれていた。

「それは何だかわかりますか。」

振り返って見ると、ある見知らぬおばあさんがニコニコして聞いてくれた。

「あー、よくわかりませんが。」

「それは絵馬と呼ばれます。神社に来た人々が自分の願いや祈りなどをその上に書いて、奉納所に結んだら実現できると信じていますよ。」と優しく説明してくれた。

おばあさんはカナダで暮らしている息子さん三人とあまり会えないから、よく桜満開の日々を選んで、ご主人様と一緒に神社に来て、息子の家族の健康と幸福を祈っているという。

名前を聞かれたので、「黄令卿」と書いて見せた。

「『れい』は、『令和』の『令』でしょうね。黄さんが和歌山に来たことを歓迎するという意味があるかもしれませんね。今日私の家に来て一緒に昼ご飯を食べませんか？」

おばあさんの露の玉が光っているような眼を見ると、胸に熱いものがこみあげてきた。おばあさんは私を家に連れて、美味しい料理を作ってくれた。食後、私たちは、お菓子と抹茶を食べながら、色々な話をした。桜の美しさもさることながら、初対面の私に親切にしてくれたおばあさんとおじいさんの心がもっと美しいと思った。7年が経ち、再びこの懐かしい土地に來られて、和歌山とは縁があると思う。このおばあさんとの出会いをきっかけに、私はいつまでも感謝の気持ちを持って、日本での留学生生活を大切にしたいと思う。

赤々とつれない春の日が、桜橋の果に沈んでいった。

気づかないうちに夜が迫ってきた。桜橋を見回したと、まだその美しさに心を奪われていた。散った花びらを手に取って見ているうちに、こういう考えが湧いてきた—「私も中日友好の懸け橋になりたいな！」

一度やんでいた風が、また止めどもなく吹いてきた。桜の花びらをポケットに入れて帰った。

